



見附市教育センターだより



〒954-0052

見附市学校町2-7-9

電話/Fax 0258-62-2343

E-mail mrisen@mitsuke-ngt.ed.jp

令和7年11月26日 NO.8

『見附市立図書館』11月6日

「からかい」

すこやかルーム支援員 小川 義実

家族や友人たちと「からかい合う」のは、たわいのない楽しい時間である。

しかし、学校現場で同じ「からかい合う」から、やや一方的な「からかい」になった場合、からかわれた子供を傷つけてしまうこともよくあることではないだろうか？

数年前、すこやかルームに通室していた中学生のAさんが、しばらくぶりに学校へ登校した時に、廊下ですれ違いざまにある生徒に「き〇〇。」と、小声でささやかれたとのことだった。それだけが再び不登校になった原因ではないだろうが、結局卒業するまで、すこやかルームに通室し続けることになった。残念な出来事であった。

私が子供時代を過ごした昭和より、令和の生徒指導は格段に充実している。先生方一人一人がいじめについて、被害者の立場に立って全力で取り組んでいる。その学校現場でなぜ、こういった「からかい」がなくならないのか。この「からかい」という厄介なコミュニケーションについて、少し考えてみたい。

江原由美子氏は、著書『女性解放という思想』で「からかい」を次のように分析している。

集団内で「からかい」が提起されれば、それに反対する理由が特にないかぎり、「からかい」の共謀者となることが、その場にいる全員に要請される。なぜなら「からかい」は、「遊び」であり「冗談」だからである。「遊び」である以上、ルール破りは、最大の「遊び」に対する冒瀆なのである。したがって、ルールを破らないという消極的な共謀を、そこにいる人々すべてが要請されるのだ。ルール破りをあえて行うにはかなりの勇気がいるだけでなく、その場にいる皆を納得させるだけの正当な理由が必要なのである。

学校で、からかいから発展するいじめの例もあるだろう。それは数少ないものなのだろうか？もしかすると、学校内で「からかい」を提起する児童生徒を見逃したり、「からかい」の共謀者に適切な指導をしたりしないまま、時が流れていることはないだろうか？

学校や家庭は「からかい」を安易に考えてはいけないと思っているに違いない。児童生徒が「いやだなあ～。できればやめてほしいなあ～。」と思っている同級生の言動に対して、教職員全員で耳を傾けて対処してほしい。ましてや共謀者になるなどもってのほかである。「冗談ですよ。みんな言ってますよ。」等、首謀者も共謀者もたくさんの屁理屈で対抗してくる場面を経験している教職員も多いはずである。「たとえ、クラス全員を敵に回してもこの子を守る。」という強い意志をもって児童生徒たちの教育に携わってもらいたい。

ある日、Aさんの高校生活的一面を切り取った動画を、下級生のBさんが見せてくれた。「先生、ほらAさん元気だよ。教室で仲間とこんなに笑っている。」

部活動で有名なこの高校で、Aさんの本当の意味での青春がスタートしたのだと思っている。



卷頭写真に寄せて 「図書館は、学びの宝庫」

◇11月に入り寒さが増し、木々の紅葉が進んだ6日(木)は、見附小学校の師がく訪問であった。下記コラムに記した良い表情の授業を参観し、豊かな心で、ふと休み時間に図書館を見る(一番上写真)と、図書館壁面の茶色と少しずつ異なる木々の色合いが何とも言えなく美しかった。

帰りに通りを越えて、図書館正面側から撮ったものが卷頭写真である。◇さて、皆さんは図書館を利用したり、図書館をどのくらい知っていたりするだろうか。この建物は昭和62年にでき、蔵書数は約20万冊あり、他に雑誌や新聞等も充実しており、年間13万人以上が利用をしている。開館日数が300日程なので、毎日400人以上が図書館を利用している。図書館は、学びの宝庫と同時に、静かで学びに最適な場所であり、学習コーナーでは、勉強に励む学生を中心に大人も多くの方が学んでいる。

◇図書館は環境も誠に素晴らしい。1階閲覧席からは見附小学校のグラウンドや木々が見え、入口側の見附市役所前通りの街路樹は、右写真のように多くの木々が、四季を通して見事な景観を見てくれる。落葉後は12月7日から、冬の風物詩のイルミネーションの点灯が始まる。図書館は中も周りも最高である。ぜひ、図書館を訪れて、学びと心の栄養に浸ってほしい。



コラム『教師も子どもたちも良い表情の授業』…豊かな心になる

◇学校行事等が続く忙しい日々の中を、師がく訪問をさせてもらい感謝である。師がくの2回目は校内研修と兼ねている授業も多く、指導案に単元構成や抽出児もあり、授業者の本時にかける思いが伝わってきて、授業参観が実に楽しい。

◇図書館周りの木々に癒された6日は、2年K先生の国語「スピーチの時うまく伝えるにはどうする?」の学習(右写真)を参観した。笑顔のあった5枚を掲示したのではない。K先生は1時間ずっとこの笑顔で、子どもたちに語りかけ、発表に「なるほどね。あ~あるね。わかるよ。嬉しいね。」等、うなずきと承認の言葉で、子どもたちにやる気一杯にさせていた。子どもたちからも「K先生との勉強は楽しい」のオーラが発散されていた。

◇この日は、もう一つ6年M先生の算数「比とその利用」の学習(下写真左3枚)を参観した。始まりと同時に「次の比を簡単にしよう」の問い合わせ次々と映し出され、その問題を解く中で「比の値はできるだけ小さい整数で求めること」を確認し、実測できない木の高さを棒の影との比で求める学習だった。このM先生も、温かなまなざしで語りかけ、落ち着いた雰囲気で深まりのある学習が展開された授業であった。

◇別の日に、5年H先生の社会「自動車の生産にはげむ人々」で「自動車をどのように速く製造している?」について、予想を立てる学習を参観した。(写真下右3枚)写真のH先生の顔を見てほしい。話す時も話を聞く時も真剣な表情で、一生懸命さがビシビシ伝わってきた。子どもたちも真剣に学び、自分の考えを伝え合っていた。この授業も良い表情の授業である。

◇他校の師がくも同じく、教師も子どもたちも、良い表情での授業を多く見せてもらって、最高に充実の師がく訪問の日々を過ごしている。(c)



4時から夢塾　私たちが「漢文から学べることは」

第13回を10月14日(火)に、宮田優美先生(新潟大学附属長岡中学校教諭)から、表題をテーマに「中学校1年漢文学習の導入」の授業公開とミニ講座でご指導を頂いた。簡単に説明をする。

1. 授業の様子

○日本が平安時代だった頃の中国(北宋)の百科事典を見てみよう。

- ・「異」の字義を調べ、「僧」と「異僧」の違いを予想する。
- ・『太平廣記』に「僧」の部と「異僧」の部があることを紹介する。

○「異僧」の部に収められる4人の僧侶のエピソードから「異僧」という言葉の意味を定義してみよう。

- ・どのように定義できるかを、個人→グループ→全体の順で検討する。

◎現代の日本で生きる私たちは、漢文からどんなことが学べるだろうか。

・本時の最初にもった考えやイメージを想起し、漢文から私たちが学べることを考える。

- ・漢字に着目する意味と4つの逸話が生まれた当時の時代背景を考える。

○「触れさせたい考え・捉え」

- ・当時の人々の物事の見方や考え方を知る手がかり。

- ・当時の中国での用いられ方を知り、現代の日本での意味や用法を理解するきっかけ。

2. ミニ講座 (1) 本日の授業について ◇私たちが「漢文から学べることは」

○漢字の意味が、今と同じかどうかに着目して考える。

・訓読の仕方を身に付ける。語彙や名言を知る。(この故事成語はこんな故事があった。)

- ・問い合わせの予想をもって読む。どんな意味があるかを考える。

(2) 教科書の一歩先“本物”と出会う授業を目指して…「実践紹介」

○実践①… 2年「短歌の味わい」斎藤茂吉：4部構成「死にたまふ母」

- ・連作を教材に、1首を学ぶのではなく「本当はどうなのか」を知る。

- ・時代背景や状況をふまえて短歌を読む。茂吉になりきって詞書または左注をつける。

- ・生徒は作品全体で見る大切さ。時代や生活を理解すると深く読めることを理解した。

○実践②… 1年「少年の日の思い出」ヘルマン・ヘッセ：高橋訳と岡田訳の比較に挑戦。

- ・教科書訳を絶対のものとして学ぶのではなく「本当はどうなのか」を相対的に知る。

<参加者の声> ○なぜ△△を学ぶのかという切り口が生徒たちにとって

大切だと感じた。自分もそのような意識をもち授業をしていきたい。

○生徒が言葉にこだわって主体的に考える様子が伺え、日頃の授業を見直すきっかけになった。古典にどのように取り組ませればよいかを悩むことが多かった。本日の授業を参考にして授業を行っていきたい。

○漢文を学ぶ意味を考えさせる大切さを知った。漢文も古典も、文章全体が何を伝えているかという視点で読むと、国語の楽しさや考える楽しさを感じられると思った。

○深い教材解釈に基づいた教材構成の大切さを学んだ。深い教材解釈をすることで、教材に愛着をもち、わくわくして授業をすることができる。私はこう考えたけど、生徒たちはどう考えるだろうか?まさに、生徒たちと一緒に考え、伴走する授業を見た。



宮田 優美 先生



先進校視察報告「第70回全国体育学習研究協議会 山形大会」への参加

11月7日(金)8日(土)の両日、山形市立第十中学校、山形大学附属小学校の表題の研究発表会に参加をした。ねらいは「子どもたちと楽しい体育の授業実践」ができるように、学んだことを日々の授業実践に生かすためである。



見附小学校

1 研究主題 =子どもの姿をもとに、みんなで取り組む楽しい体育の
カリキュラムづくり = 山形大会テーマ「みんなでつくる 楽しい体育」

2 研修について

(1)研修内容 第十中学校…2年生：タグラグビーの授業参観、授業後の協議会への参加
附属小学校…6年生：ジョギングの授業参観、授業後の協議会への参加

(2)研修で学んだこと

◇授業参観で学んだこと

① 子どもが主体的に「楽しい体育」を創造する

子どもたちは教師の指示に従うだけではなく、子どもたちが自ら考え工夫し、意思決定するプロセスを授業の中心に据えていた。教師の手立てで、子どもたちが自ら創り出す楽しさや価値を感じていた。

② 資質・能力の育成を目的とした授業デザイン

タグラグビーはゲームの状況を分析し、フェアプレイを見付けて仲間に伝えたりチーム戦術を考えたりする力を育成。ジョギングはデータから自己の動きの変化に気付き、仲間に説明したり、目標達成のための計画を立てたりする力が養われる授業展開であった。

③ 仲間との協働的な学びと関わり

技能の向上だけでなく、仲間との関わりを通じた学び、人間性の育成も大切にしていた。

◇協議会で学んだこと =これから体育授業の方向性について=

「子どもの主体性を引き出し、子どもと教師の協働によって体育授業をより深く、多様な楽しさに満ちたものに再構築する」という教育実践の変革について、議論が交わされて、「50%の教師の計画と50%の子どもの意見」という考え方方が大切になることを学んだ。

3 今後に向けて …学んだことをもとに、次の2点を意識して実践していく。

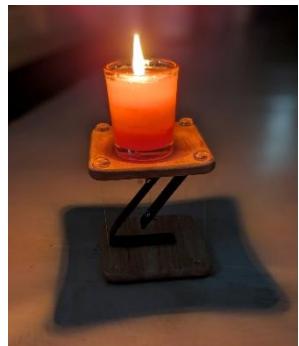
今後の体育授業の中では、①子どもとカリキュラムを創ること。②カリキュラムを創るために「子どもを見取ること」の2つを、積極的に取り入れていく。

具体的には、今後も授業前に「教材解釈する、子どもを深掘りする、単元をデザインする」という計画作りを継続していく。加えて授業中は「問い合わせる」「価値づける」「指導する」「支援する」「繋げる」「言語化する」「場を創る」「広げる」「収束する」「疑う」「掘り下げる」「可視化する」という視点で子どもを見取っていく。その見取りを基に、子どもの学びの促進を目指して子どもの事実を知り、それを指導に活かしていく。例えば、授業後に「キャプテン会議」を位置付けて、選抜した子どもたちと教師がゲームのルールやゲームの中でやってみたいこと等を話し合う機会を設定する。そうすることで、子どもたちのリアルな感情を教師が知ることができ、より授業が子どもたちに合ったものになっていくと考えられる。

本研修で学んだことを活かして、体育授業の改善に取り組んでいきたい。



科学教育部



「廃油キャンドル」

(第4回土曜子ども科学教室で作成)

(12.1月の研修案内)

1	単元別研修会 【小4 ものの温まり方】	1月 16日(金) 15:40~16:40	単元の進め方のポイントを紹介し、熱の伝わり方に関する教材の作成や実習をします。
---	------------------------	--------------------------	---

*研修会の申込について、新たな参加希望がありましたら、見附市教育センター科学教育部まで電話またはメールで申し込みをしてください。

秋を感じる身近な自然事象

熊の出没が相次ぎ、気軽に森林公园で紅葉を見たり、栗拾いに出かけたりすることが難しく、なかなか屋外で秋を満喫できません。しかし、身のまわりには、秋になり冬が近づいてきていることを感じられる自然の事象がたくさんあります。例えば、

身近に見られる「秋」の変化	理由
①空気が乾燥する	冬型の気圧配置になり、大陸から乾燥した風が吹くため。
②空が澄んで見え、夏より雲の位置が高くなる	空気中の水蒸気量が減り、湿度が下がるため。
③街路樹の落ち葉が増える	乾燥による過剰な蒸散を防ぐため、落葉樹が余分な葉を落とすから。
④朝方、吐く息が白く見える	息に含まれる水蒸気が冷たい空気で冷やされて水滴となり（状態変化）、その水滴で光が散乱するため。
⑤静電気が起きやすくなる	空気が乾燥して、身体にたまつた静電気が空気中へ逃げにくくなるため。
⑥空が澄んで見え、天体観測がしやすくなる	空気中の水滴や微粒子が減り、夏より光の散乱の影響が少ないから。

これらはどれも、冬が近づくにつれて「**空気が乾燥すること**」が関係しています。

他にも、「**夏野菜と比べて秋・冬野菜が甘い**」、「**メダカや金魚がエサをあまり食べなくなる**」、「**日が沈む時間が早く、日が昇る時間が遅くなる**」なども「秋」を感じる自然の変化です。

「**どうして秋になると、●●になるのだろう？**」と考えてみると、いつもの景色の中から新しい発見があるかもしれません。ぜひ季節の変化を観察してみてください。

科学の公園

カメムシってどんな生き物？

秋になり、理科室で授業をしていると、いつの間にか理科室の窓のカーテンにカメムシがとまっていて、生徒が思わず悲鳴を上げる場面が増えてきました。カメムシといえば、「くさいにおいを出す虫」というイメージが強く、敬遠されがちですが、実際にはどのような生物なのか知っていますか？

カメムシは、動物界-節足動物門-昆虫綱-カメムシ目-カメムシ亜目に属する昆虫の総称で、日本では1300種以上が生息しています。セミ、ヨコバイ、アメンボも同じカメムシ目の仲間で、針のように細長いストロー状のくち（口吻）で、植物や動物の体液を吸うという共通点があります。尖ったストロー状の口を持つ昆虫がいたら、基本的にカメムシ目だと考えてよいでしょう。

新潟県では「アオクサカメムシ」、「クサギカメムシ」、「ツヤアオカメムシ」などが身近によく見る種として知られており、「へこき虫」や「クサムシ」などの俗称でひとまとめに呼ばれることがあります。

カメムシが嫌われてしまう一番の理由は、危険を感じたときに出す強いにおい（警戒フェロモン）です。これは、敵から身を守るために防御手段で、人の手や服につくとなかなか取れないため、苦手に思う人も多いでしょう。しかし、カメムシが出すにおいはもう1種類あります。それは、仲間とコミュニケーションをとるためのフルーティーにおい（集合フェロモン）です。ネムノキにいる「オオクモヘリカメムシ」の集合フェロモンは、青リンゴに似た甘酸っぱい香りがして、良いにおいだと感じる人もいます。

一方で、カメムシには自然を支える良いはたらきもあります。多くの種類は植物の汁を吸って生きていますが、森では木々の健康状態を知らせる環境指標生物として扱われるほか、他の昆虫やクモなどの餌となり、食物連鎖を支える存在でもあります。さらに、農作物につくアザミウマやアブラムシを食べてくれる「ハナカメムシ」のように、農業に役立つ益虫もいます。

あまり人気はありませんが、自然界のバランスに欠かせない生き物・・・・それがカメムシです。嫌われがちな生き物にも、大切な役割があることを知ると、少し見方が変わるかもしれません。

参考

<https://www.city.kyoto.lg.jp/hokenfukushi/page/0000318715.html> (最終閲覧2025/11/14)

<http://www.ha.shotoku.ac.jp/~kawa/KYO/SEIBUTSU/DOUBUTSU/05kamemushi/kame/index.html> (最終閲覧2025/11/14)

